

親になるための共感性におよぼす性と愛着要因の影響 —養育環境とのかかわりにおいて—

Effects of gender and attachment factors on empathy required to become parents
-Under relationship with childhood environments

高田理衣¹⁾・安念保昌²⁾

椋山女学園大学¹⁾・愛知みずほ大学²⁾

Rie TAKADA¹⁾ and Yasumasa ANNEN²⁾
Sugiyama Jogakuen University¹⁾ and Aichi Mizuho College²⁾

Abstract.

Opportunities for observing parents caring for small children and helping parents have decreased in recent times, because of the increase in nuclear families, the declining number of siblings and decreased interactions in local communities. It would be useful to investigate correlations among these factors to identify suggestions for supporting the social development of contemporary young people. Factors related to the environment in which a person was raised (14 items), attachment factors (19 items), and effects of the differences in childhood environment on readiness for parenthood required for becoming parents (26 items) were investigated. Students of seven schools (N=1,396) that gave their informed consent participated in the study. Among them, valid 1,025 data were analyzed. Covariance structure analysis revealed the overall structure: In females, the social factor had a direct impact on “affirmative attitudes toward becoming parents” with some bypassed effects of a person’s self-image and image of others. On the other hand, in males there is no such direct impact on any factor among readiness for parenthood. Only negative self-image affects “sympathetic responsiveness to children” and “affinity for parents”. It is discussed that experiencing extrovert socialization as a result of relationships with friends and family might have provided opportunities for developing trust in parents under different effect of attachment factors between genders.

キーワード：親準備性，養育，共感性，愛着形成

Key Word：Readiness for parenthood, nurturance, empathy, formation of attachment

はじめに

日本では、第2次世界大戦後より都市部への人口集中の過程で核家族化が進行し、現代においては核家族が普通になっている。家族形態は三世代世帯や核家族世帯の一般世帯数に占める割合が減少する一方、単独世帯は急増している。加えて、高度経済成長により家庭用電化製品が普及し、子どもが家事などを手伝う時間が減少することで、家族と一緒に作業する機会が減少している。地域教育においても、都市部では地域で行ってきた行事や共同作業が少なく、子どもが大人と交わる時間が少なくなっている。それにより、核家族化やきょうだい数の減少、地域交流の希薄化により、コミュニティとしての体験が少なくなっていると推測される。また、少子化時代に大切に育てられた学生たちは、限られた環境のなかで過ごすことが多いため、

いろいろな人と話す機会が少なく、積極的に人との交流を求めているわけでもないといわれている。したがって、幼い子どもの世話をする親を身近に見る機会やそれを手伝うなどの体験が少なく接触体験がないままに親となることで、親性を育む機会がなく未熟な状況で親となることが考えられる。

親準備性も自身の乳幼児期から青年期までの体験を通して育成されていくものであるとし（岡本・古賀，2004；佐々木・他，2010；牧野・中西，1989）、子どもとの接触体験が多い者は、親準備性が高い報告（牧野・中西，1989）や自分が親から受けた養育体験が大きな影響を与えると指摘されている（松岡他，2000；斎藤他，1992）。今日の日本において日常生活の中で身近に子どもと接する機会が減少していることから、若者が子どもとどのように関わっていけば良いのか、どの

ように接したらよいのかわからないのではないかと予測される。

将来自分が親となることをイメージすることが困難な状況となっており、成長段階においての社会的心理の発達がおこなえていないのではないかと予測される。

このことから、親になるための共感性に対する行動には、愛着要因と関連があるのではないだろうか。

親になるための発達過程については、親準備性と養護性の尺度を使用された検討が多くみられる。親準備性の定義は、「青年期における心理的「親」の準備状態」（井上・深谷，1983）、「情緒的、態度的、知的に親としての役割を果たすために十分なレディネス」（井上・深谷，1986）とされた。そして、「子どもが将来、家庭を築き経営していくために必要な、子どもの養育、家族の結合、家事労働、介護を含む親としての資質、およびそれが備わった状態」と定義される（岡本・古賀，2004）。

愛着形成は、ある人物が特定の個体や集合体に対して形成する愛情に基づく結びつきとされ、早期の個人の適応性を向上させるために発達したとされている（Bowlby，1973）。1）近接性の模索、2）安全な避難所、3）分離苦悩、4）安全基地が提唱された（Bartholomew & Horowitz，1991）。それにより、乳幼児の要求や感情などの表現や信号を、大人が正しく捉えて応答的であることが重要であるとしている（Ainsworth，1978）。

そして、親になるために必要な適性という観点から、共感性よりさらに発展して、それに応じたケアができることが必要であるとしている（伊藤，2010）。また、親密な関係の確立は青年期における中心的課題とされている（Berscheid，1999）。よって、愛着形成がされていくことで、発達過程のなかで自己を信頼し、より広い社会のなかで人間関係を築いていくとしている（Bowlby，1973）ことから愛着形成の要因が大きく影響するのではないだろうか。

以上より、親になるための共感性に影響を及ぼす要因には、養育環境と愛着要因があるのではないか。本研究の結果が明らかになれば、親になることへの不安などについての軽減を示唆することで、愛着形成の必要性についての理解を構築ができると期待される。

目的

養育環境に関わる要因と親になるための共感性の発達要因を明らかにし、愛着要因の相互関連性から、親になるための共感性に対してどのような影響があるのかについて明らかにすることを目的とする。

方法

1. 研究デザイン

「養育環境の違いによって親となるための育成過程に対してどのように影響があるのか」について、その関連性を調べるため「探索型研究デザイン」を用いる。

2. 用語の定義

共感性：「幼児の要求や感情の表出を理解し、応じようとする」こと（伊藤，2010）。本研究では、親を発達主体と捉え、生涯発達を前提とした親になる以前の発達段階において、育むべき適性として、幼児に対しての発達のことをいう。

愛着要因：Bowlby（1973）は、ある人物が特定の個体や集合体に対して形成する愛情に基づく結びつきのことを愛着と呼んだ。本研究では、中尾ら（2004）が挙げた一般他者に対して、親密な他者を受け入れるかどうかの要因（親密性回避要因）と、自己を受け入れるかどうかの要因（見捨てら不安要因）の2つの要因から構成される。

3. 研究対象

本研究の趣旨を説明し、参加の同意を得られた高校生から大学生の学生を対象とした。

4. 研究期間

平成28年6月～7月

5. データ収集方法

質問紙によるアンケート調査を実施した。アンケート依頼に研究の趣旨と方法の説明文を添えて各施設の代表者に手渡しした。研究協力の承諾が得られた代表を通して各クラスに無記名自己記入式質問用紙を配布した。回収は、指定された場所に提出してもらい、各施設に研究者が直接回収をした。

6. 調査内容

1) 共感性

伊藤ら（2010）が作成した「幼児への共感的応答性」を用いた。この質問用紙は、「幼児への共感的応答性」「幼児の発達に関する知識」「自分の親への親和性」「親になることの肯定性」の4要因にカテゴリー化された37項目から構成されている内の因子負荷量0.5以上の25項目から構成した。尺度全体の信頼性（内的整合性）は、 α 係数0.7以上を示している。回答選択枠は、「全くそう思わない（全く知らない）」～「非常にそう思う（非常に知っている）」の6件法で回答を求めた。

2) 愛着因子

中尾 (2004) が信頼性と妥当性について検討した「愛着スタイル尺度」を用いた。この質問用紙は、30 項目から構成されている内の因子負荷量 0.55 以上の 19 項目から構成した。尺度全体の信頼性 (内的整合性) は、 α 係数 0.7 以上を示している。回答選択枠は、「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の 6 件法で回答を求めた。

3) 基本属性

①性別、②年齢、③学年、④専攻またはコースは何ですか、⑤今、勉強しているコースは自分の希望とおり、⑥両親となんでも相談や話ができる関係、⑦なんでも相談できる友達、⑧兄弟や姉妹はいる、⑨何人兄弟 (姉妹)、⑩何番目、⑪中学生の時に、赤ちゃんとのふれあい体験経験、⑫兄弟・姉妹の面倒をみたことがある、⑬親戚の子や近所の子の面倒をみたことがある、⑭両親と一緒に暮らしていますか、⑮中学時代の家族構成の 15 項目について回答を求めた。

7. データ分析方法

回答された数字の分散をとり、同じ数字で回答されたものを排除し統計処理を行った。

1) 基本属性因子

記述統計処理を行ったのち因子分析 (主因子法、最小二乗法、プロマックス回転) を行い、固有値が 1.0 以上の基準により因子抽出し、プロマックス回転を行った。

2) 共感性と愛着要因の関連因子

記述統計処理を行ったのち共感性の「幼児への共感的応答性」「幼児の発達に関する知識」「自分の親への親和性」「親になることの肯定性」の 4 カテゴリーと愛着要因の「見捨てられ不安」「親密性回避」の 2 カテゴリーとの関連について、分散分析、多重比較 (Holm 法) と共分散構造分析をした。記述統計、分散分析と多重比較の分析は統計ソフト HAD15.102 を使用した。共分散構造分析には Mplus7.4 を使用した。

8. 倫理的配慮

事前に各施設の代表または担任に研究内容と目的、プライバシーの保護について文書及び口頭にて説明し、研究の承諾を得た。

結果

1. 質問用紙の回収状況について

協力を得られた 7 施設の 1,396 名に配布し、1,071 名 (回収率 76.7%) から回答が得られた。そのうち同じ

数字で解答されたもの 46 名を除外し、1,025 名 (有効回収率 95.7%) を分析対象とした。

2. 対象者の属性について

対象者の属性について Table 1 に示す。

Table 1 対象者の基本的属性

		n = 1025		
人数 (%)		人数 (%)		
性別	女性 783 (76.4)	兄弟や姉妹はいますか	いる 871 (85.0)	
	男性 241 (23.5)		いない 144 (14.0)	
	未回答 1 (0.1)		未回答 10 (1.0)	
学年	何人兄弟 (姉妹) 何人ですか		1人 81 (9.3)	
	何番目ですか		1番目 341 (39.0)	
	中学生の時に、赤ちゃんとのふれあい体験経験をいたしましたか		あった 390 (38.0)	
兄弟・姉妹の面倒をみたことがありますか			満3日以上 220 (21.5)	
親戚の子や近所の子の面倒をみたことがありますか			満3日以上 61 (6.0)	

3. 基本属性因子について

基本属性の 9 項目を主因子法によるプロマックス回転を伴う因子分析をおこなったところ、4 因子が見いだされ、全分散の 65.33% を説明した。

第 1 因子は「兄弟 (姉妹) はいますか」「兄弟 (姉妹) は何人ですか」「何番目ですか」の項目からなり「きょうだい性」と命名した。第 2 因子は「兄弟・姉妹の面倒はみたことがありますか」「親戚の子の面倒はみたことがありますか」の項目からなり「接触性」と命名した。第 3 因子は「中学生の時に、赤ちゃんとのふれあい体験経験をしましたか」「両親と一緒に暮らしていますか」の項目からなり「家族性」と命名した。第 4 因子は「なんでも相談できる友達はいませんか」「ご両親のなんでも相談や話ができる関係ですか」の項目からなり「社交性」と命名した (Table 2)。

Table 2 基本属性の因子負荷量

因子	項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
きょうだい性	きょうだいは何人ですか	.898	.153	.037	-.045	.841
	何番目ですか	.666	-.273	.041	.035	.490
	きょうだいはいますか	.406	.111	-.031	.001	.190
接触性	きょうだいの面倒	-.008	1.021	.069	-.018	1.004
	親戚の子の面倒	.086	.333	-.197	.109	.237
家族性	ふれあい体験	.008	.014	-.806	-.011	.653
	両親と一緒にくらしている	.082	.026	.166	.090	.030
社交性	相談できる友達がいる	.013	.009	.038	.611	.363
	両親になんでも相談できる	-.033	.028	.055	.559	.300
	因子寄与	1.444	1.353	0.877	0.768	
	α 係数	.589	.545	.138	.495	
	因子得点	.836	.995	.675	.518	
	固有値	1.948	1.647	1.257	1.028	
	累積寄与	21.643	39.948	53.910	65.332	

4. 愛着要因と高校生・大学生の分散分析について

1) 高校生・大学生における見捨てられ不安 (Figure 1)

性と高校生・大学生の要因を独立変数とし、愛着因子に関する見捨てられ不安を従属変数とする、2 要因参加者間分散分析を行った。その結果、高校生・大学生の主効果が 5%水準で有意となり ($F(1, 810) = 4.181$, $p = .041$, $\eta_p^2 = .005$)、高校生よりも大学生の方が見捨てられ不安が高いことがわかった。性 ($F < 1$) とそれらの間の交互作用 ($F < 1$) には有意差はみられなかった。すなわち、高校生と大学生では差は認められたが、性差は認められなかった。

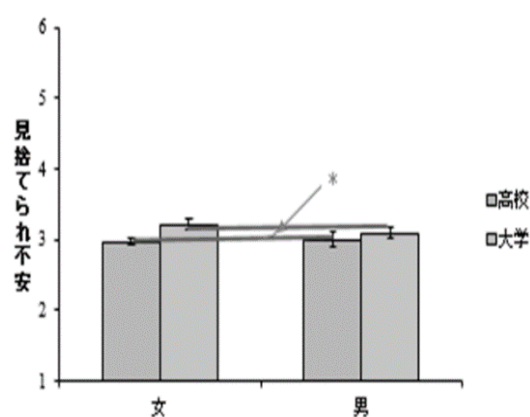


Figure 1 高校生・大学生の性による見捨てられ不安因子

2) 高校生・大学生における親密性回避 (Figure 2)

性と高校生・大学生の要因を独立変数とし、愛着因子に関する親密性回避を従属変数とする、2 要因参加者間分散分析を行った。その結果、性 ($F < 1$) と高校生・大学生 ($F = 2.656$)、それらの間の交互作用 ($F < 1$) に有

意差はみられなかった。

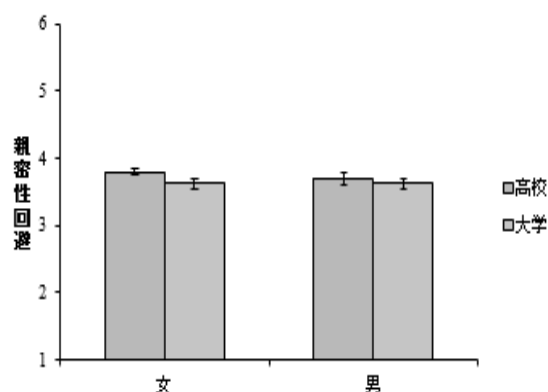


Figure 2 高校生・大学生の性による親密性回避因子

5. 重回帰分析について

1) 各要因の性差

見捨てられ不安には性差は見られなかったが、親密性回避における性差は有意傾向がみられ、女性の方が高い傾向にあった。男性が高いのは家族要因のみであった (Table 3)。

2) 性と愛着2因子による、各因子の分析

各因子における性と愛着2因子の重回帰分析の結果は Table 4 のとおりであった。性と愛着2因子の交互作用に有意差が認められた項目の単純傾斜分析は Figure 3~8 のとおりであった。

① きょうだい要因

女性においては、きょうだい要因はとらわれ型<恐れ型、安定型=拒絶型=恐れ型、安定型>とらわれ型の関係が見いだされた (Figure 3)。

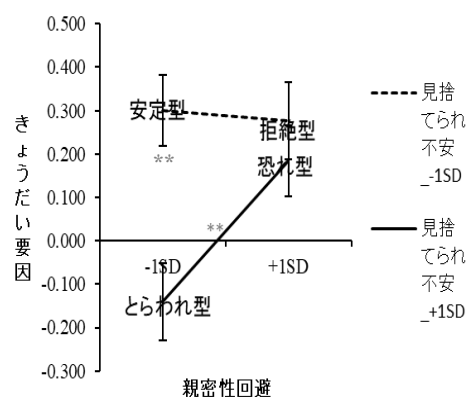


Figure 3 女性のきょうだい要因における見捨てられ不安と親密性回避の関係

一方、男性においては、（安定型＝とらわれ型）＜（拒絶型＝恐れ型）の関係が見いだされた（Figure 4）。

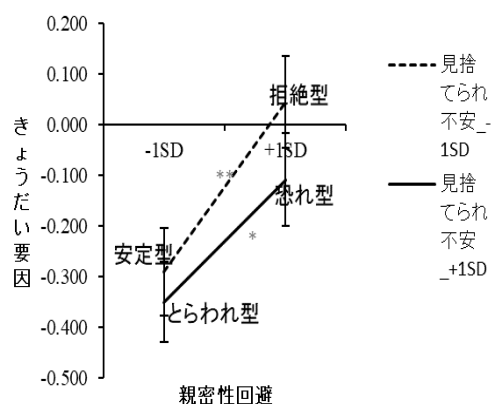


Figure 4 男性のきょうだい要因における見捨てられ不安と親密性回避の関係

②社交要因（女性）

女性は、社交性要因はとらわれ型＞恐れ型、安定型＞拒絶型の関係が見いだされた（Figure 5）。

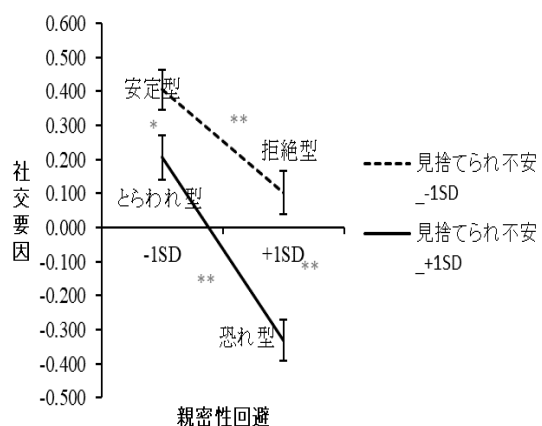


Figure 5 女性の社交要因における見捨てられ不安と親密性回避の関係

③社交要因（男性）

男性は、（安定型＝とらわれ型）＞（拒絶型＝恐れ型）関係が見いだされた（Figure 6）。

④共感的応答

共感的応答性に対しては、両性合わせて、安定型＞とらわれ型＝恐れ型＞拒絶型の関係が見いだされた（Figure 7）。

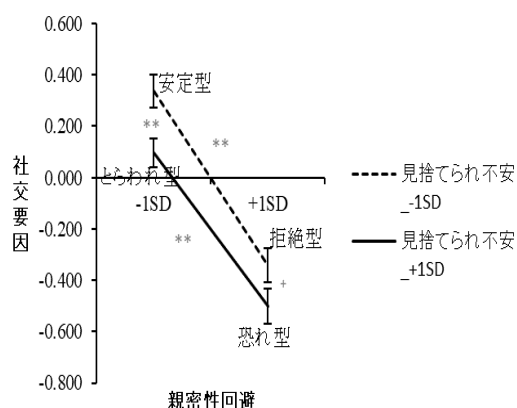


Figure 6 男性の社交要因における見捨てられ不安と親密性回避の関係

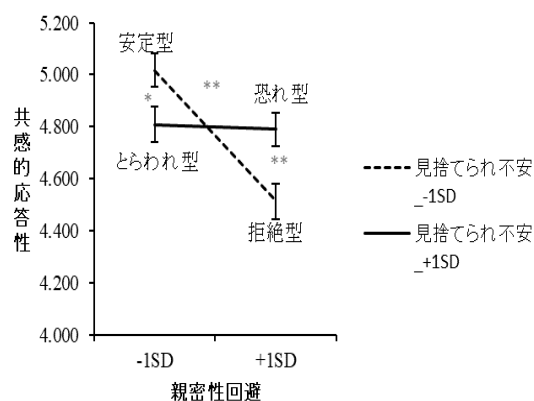


Figure 7 見捨てられ不安と親密性回避による共感的応答性への影響

⑤乳児発達知識

乳児発達知識に対しては、安定型＞とらわれ型＞拒絶型、恐れ型＞拒絶型の関係が見いだされた（Figure 8）。

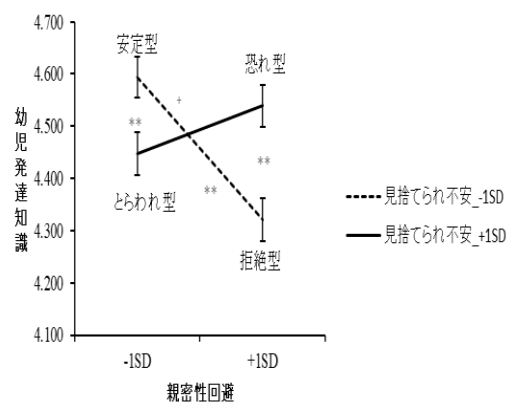


Figure 8 見捨てられ不安と親密性回避による幼児発達知識への影響

Table 3 各因子の性差

変数名	見捨てられ不安	親密性回避	きょうだい性	接触性	家族性	社交性	共感的応答性	幼児発達知識	親への親和性	親になるための肯定性	VIF
性	.095	-.061 +	-.188 **	-.066 +	.125 **	-.111 **	-.134 **	-.172 **	-.047	-.029	1.000
R ²	.001	.004 +	.035 **	.004 +	.016 **	.012 **	.018 **	.030 **	.002	.001	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 4 性と愛着2因子による、各因子の重回帰分析

変数名	きょうだい性	接触性	家族性	社交性	共感的応答性	幼児発達知識	親への親和性	親になるための肯定性	VIF
性	-.176 **	-.064 +	.124 **	-.134 **	-.141 **	-.167 **	-.058 +	-.037	1.017
見捨てられ不安	-.098 **	-.057 +	.024	-.173 **	.042	.028	.006	.011	1.015
親密性回避	.116 **	.006	.092	-.359 **	-.112 **	-.062 +	-.134 **	-.168 **	1.014
性・見捨てられ不安	.042	.034	-.065 +	.038	.070 *	.015	.064 +	.004	1.016
性・親密性回避	.036	-.015	-.028	-.073 *	-.003	.003	.016	.019	1.014
見捨てられ不安・親密性回避	.039	.024	-.057 +	-.030	.078 *	.163 **	-.032	.028	1.008
性・見捨てられ不安・親密性回避	-.069 *	.029	.019	.062 *	-.009	.009	.029	.004	1.009
R ²	.066 **	.010 **	.026 **	.188 **	.043 **	.060 **	.027 **	.030 **	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

6. 共分散構造分析

女性に Figure 9 上に、男性に Figure 9 下に結果を示した。女性 (AIC=3130.417; RMSEA=0.000; CFI=1.000; TLI=1.022) では、見捨てられ不安に対して、きょうだい性から正の有意なパス係数が、社交性からは強い負の有意なパス係数が見られ、そこから、親になることの肯定性に、負の有意なパス係数が見られた。また、親密性回避にたいしては、きょうだい性から負の有意なパス係数が、社交性からも強い負の有意なパス係数が見られ、逆に、そこから、親になることの肯定性に、正の有意なパス係数が見られた。きょうだい性と社交性からは直接正の有意なパス係数が見られ、とりわけ社交性からは、強いパス係数が見られている。家族性、社交性からは自分の親への親和性に強い直接の姓のパス係数が見られている。また、幼児の発達に関する知識に対しては、接触性から、幼児への共感的応答性に対しては、きょうだい、接触性、家族性から、直接正の有意な影響が見られているが、愛着因子は関わっていないことが分かった。

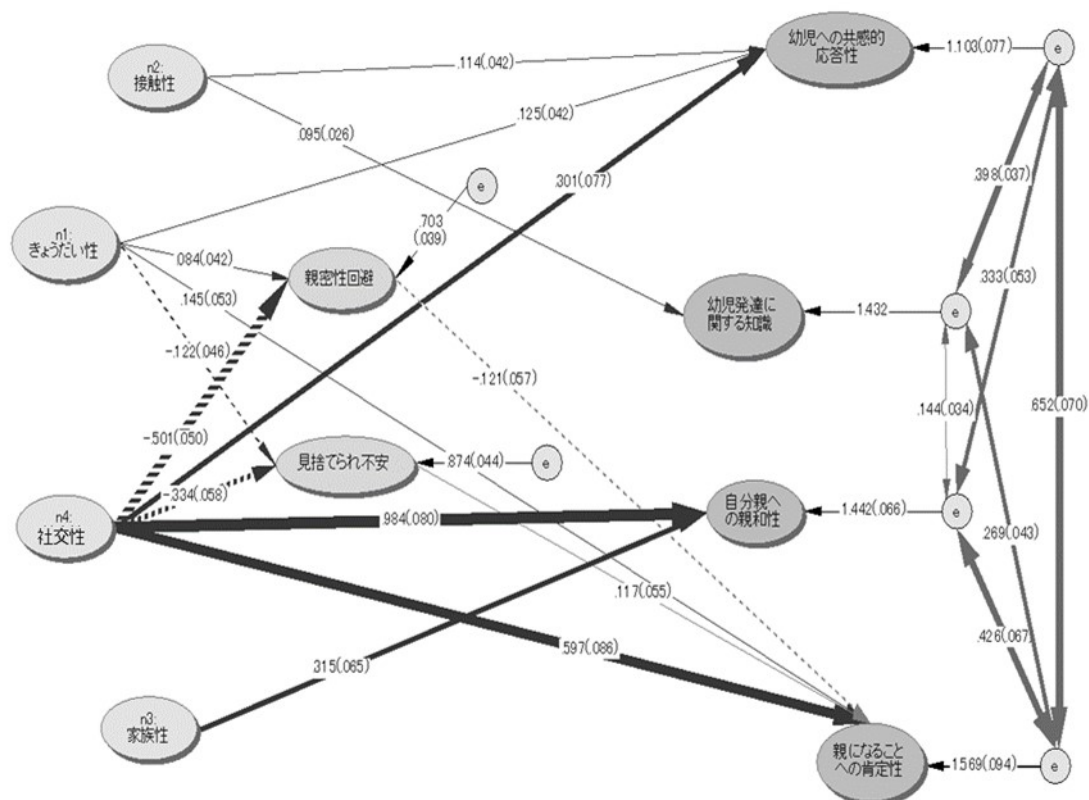
これに対して、男性 (AIC=10598.149; RMSEA=0.077; CFI=0.994; TLI=0.784) では、親になるための共感性に愛着因子でかかわっているのは、親密性回避だけであり、幼児への共感的応答性と自分の親への親和性に正の有意なパス係数が見られたが、養育環境からの影響は見られず、あったのは、見捨てられ不安の方で、きょうだい性からは正の家族性、社交性からは負の有意なパス係数が見られているが、そこから共感性には影響を持っていなかった。女性と同様に、接触性から直接幼児への共感的応答性と幼児の発達に関する知識に正の有意なパス係数が見られている。また、女性同様、社交性から親になることの肯定性に強い正の有意なパス係数が見られているが、女性と違って、それだけである。また、女性と同様、社交性から、自分の親

への親和性に強い正のパス係数が見られるが、男性には、家族性からのパスは見られなかった (Figure 9)。

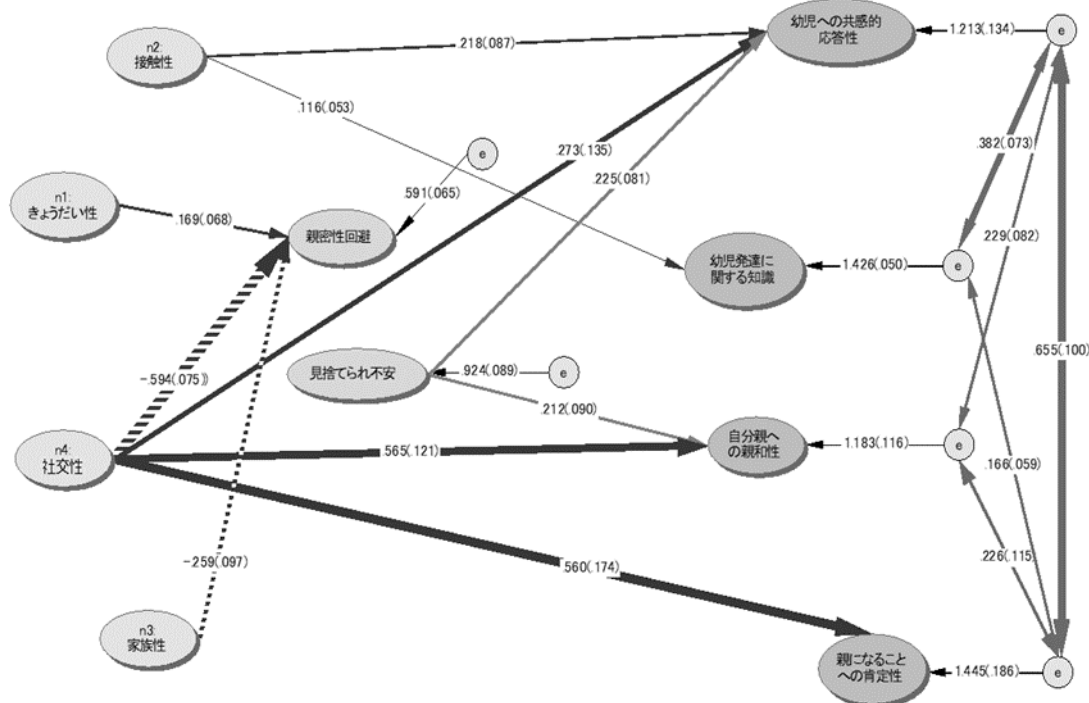
愛着因子に関連したパスだけを取り出したものを、Figure 10 に示した。

女性の愛着因子の関わりは、社交性から親密性回避と見捨てられ不安への強い負の有意なパス係数が見られた。そこから、親密性回避から親になることへの肯定性に対し、負の有意なパス係数が見られ、見捨てられ不安からは正の有意なパス係数が見られた。そして、社交性から直接的に親になることの肯定性に対し、強い正の有意なパス係数が見られた。その他の養育要因 (きょうだい性、接触性、家族性) からは、有意なパス係数はなく、共感性 (親への共感的応答性、幼児発達に関する知識、親への親和性) に対しての有意なパス係数は見られなかった。

反対に男性は、養育要因のきょうだい性から親密性回避への正の有意なパス係数が見られ、社交性・家族性からは負の有意なパス係数が見られた。また、親密性回避からの共感性要因への有意なパス係数は見られなかった。女性と違い、養育要因を介しての愛着要因から共感性要因への有意なパス係数は見られなかった。しかし、見捨てられ不安から幼児への共感的応答性と自分の親への親和性に正の有意なパス係数が見られた。



AIC=3130.417; RMSEA=0.000; CFI=1.000



AIC=10598.149; RMSEA =0.077; CFI= 0.994

Figure 9 女性(上図)と男性(下図)における
養育環境・愛着因子の共感性 4 カテゴリーへの影響

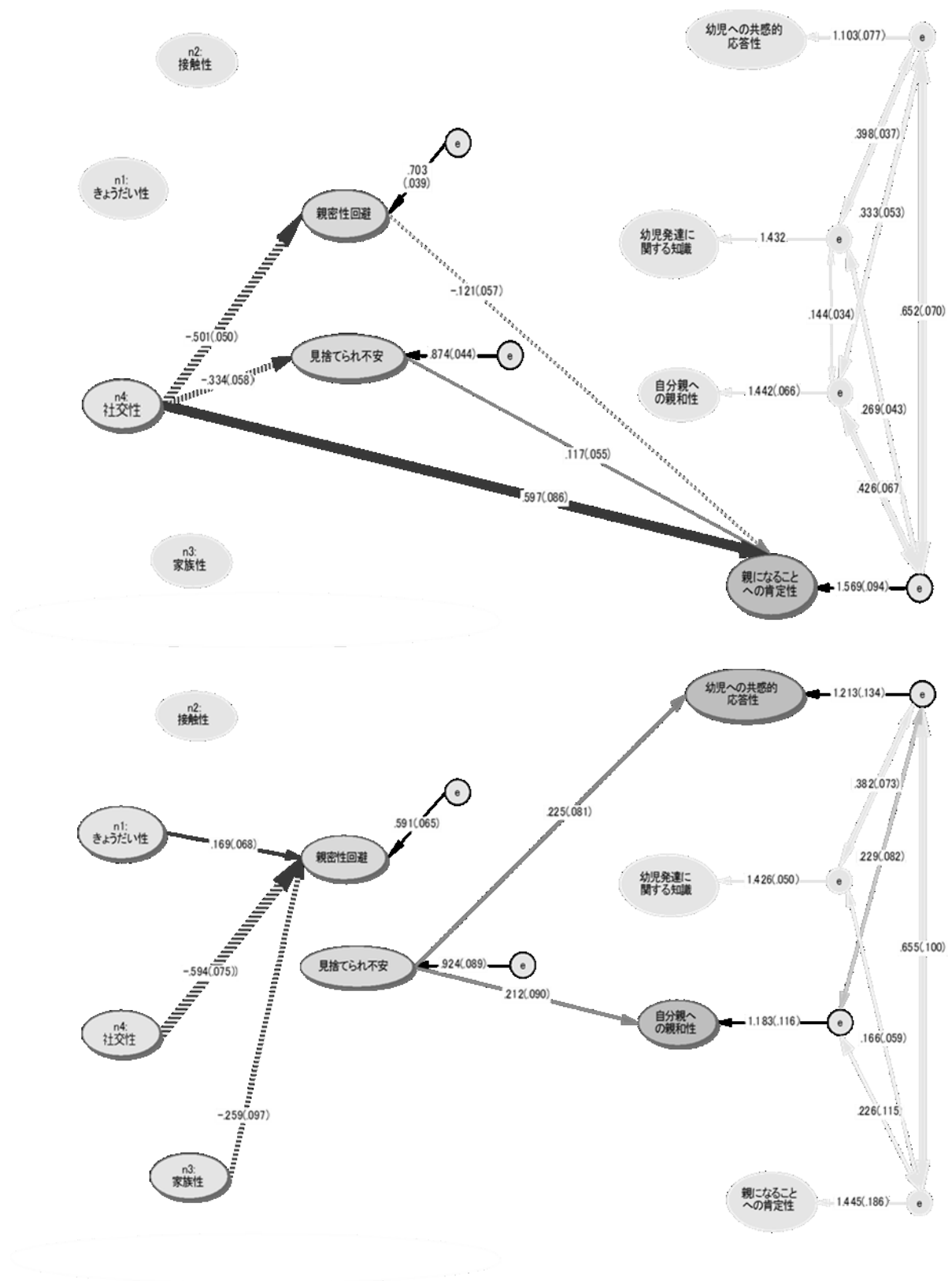


Figure10 女性(上図)と男性(下図)における愛着要因に絡んだ
養育環境・愛着因子の共感性4カテゴリーへの影響

考察

1. 愛着 2 因子の影響

1) 見捨てられ不安

分散分析の結果、高校生と大学生の差は認められたが、性差は認められなかった。大学生は自己観が高く、他者から見捨てられることへの不安や関係性の維持への不安を抱えていることが考えられる。自我同一性の確立時期であり、家族関係の変化、将来への不安等を考える時期であることからこのような結果になったと考えられる。

2) 親密性回避

分散分析の結果、高校生と大学生の親密性回避においての差は認められなかった。しかし、高校生は身体的成長の完了に近づく時期となる。そして、様々な要素の関係性がこのような結果となり、将来への展望においての分岐を考える時期によるものと考えられる。よって、同性における学年別での状況把握が必要であることが示された。

2. 養育環境と性の影響

1) 各要因の性差

きょうだい要因、社交要因は女性が高く、家族要因は男性が高いことが示されたことから、女性は、兄弟が多く、相談できる友達や両親とよく相談しているのにもかかわらず、赤ちゃんとのふれ合い体験が男性に比べて少ない状況である様相が示された。一方、子どもへの共感的応答性や幼児発達知識は男性が高いことが示された。こうした状況は、従来の常識とはかけ離れている様相である。伊藤ら（2010）は「幼児の発達知識に関する知識は年齢が高くなるに従って高まること、ただし、男子よりも女子のほうが高いという性差は維持されていくこと」の報告であったが、今回は違う結果が示された。

2) 性と愛着 2 因子による各因子の分析

しかし、性と愛着 2 因子を絡めた重回帰分析で、複雑な状況が見られることが分かった。きょうだい要因の女性においてのきょうだい因子と愛着要因から、信頼関係や誰かに頼りにしたりされたりする関係を求めているが、全面的な信頼関係を築くには不安を感じていることが考えられる。きょうだい人数や何番目などによって関係が微妙な変化が考えられる。そして、信頼関係を求めながらも、家族間での比較対象となる中で、「安定型」を築くよりは、きょうだいはライバル関係にあると推測される。男性は 2 極化しており、きょうだいに対し信頼関係を求めるのではなく、一定の距離を置く関係となっていると推測される。これは、

自律を求め人間関係の距離感を模索していると考えられる。また、項目ごとに精査することでどの項目からの有意差が見られるのかを確認する必要がある。

女性における社交要因は、人間関係における親密性を求めている反面、拒否されるのではないかと考えていると推測される。両親や友達に相談はするが、裏切られるのではないかと不安な気持ちをいだきながら、信頼できる人間関係を模索していると考えられる。男性も同様に自律を求め人間関係の距離感を模索していると考えられる。また、項目ごとに精査することでどの項目からの有意差が見られるのかを確認する必要がある。

共感的応答性は男女共に、「安定型」が有意になっていることから、見捨てられ不安と親密性回避子の 2 因子ともに低く、愛着要因が確立されていると推測される。それにより、困っている子どもや泣いている子どもに対し、共感を持ちながら関わる事が出来ると思われる。

乳児発達知識は男女共に、「安定型」が有意になっていることから、見捨てられ不安と親密性回避子の 2 因子ともに低く、愛着要因が確立されていると推測される。それにより、幼児発達に対する一定の知識があると考えられる。

3. 養育環境と愛着のパス構造

上記のような構造的違いが、共分散構造分析のパス構造において表れた。親になるための準備としての 4 つの共感性に関して、愛着の 2 因子の関わり方が、男女で、全く異なっていることが示され、愛着 2 因子が、出産のための生殖的な関わりで、大きな違いを見せていることが示された。

しかし、一方で社交性が、幼児への共感的応答性、自分の親への親和性、親になることの肯定性に影響を与え、また、接触性が親になることの肯定性、幼児の発達に関する知識に影響を与えている。こうした点においては、共通性が見られ、接触性や社会性といった養育環境が性に関わらない形で、親になることへの共感性に直接影響を持っていることが示された。このような違いや共通性を理解することが、子育てを共同で参画していくために重要になっていくことが示された。

まとめ

青年期は、親からの独立し、自我同一性の確立時期となり、身体的変化を伴う時期から、著しい成長発達をする時期となる。

今回、親になるための共感性との関連について、養育環境と愛着要因の側面から検討をおこなった。それにより接触性や社会性といった養育環境が性に関わら

ない形で、親になることへの共感性に直接影響を持っていることが示された。こうした違いや共通性を理解することが、子育てを共同で参画していくために重要になっていくと示唆される。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of Attachment: A psychological study of strange situation*, Hilldale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L.M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Berscheid, E. (1999). The greening of relationship science. *American Psychologist*, 54, 260-266.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss*. Vol. 2. *Separation; Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- 井上 義朗・深谷 和子 (1983). 青年の親準備性をめぐって 周産期医学, 13, 2249-2252.
- 伊藤 葉子・倉持 清美・岡野 雅子・金田 利子 (2010). 中・高・大学生の幼児への共感的応答性の発達とその影響要因 日本家政学会誌, 61, 129-136.
- 牧野 カツコ・中西 由雪夫 (1989). 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(1) 日本家庭科教育学会誌, 32, 51-54.
- 牧野 カツコ・中西 由雪夫 (1989). 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(3) 日本家庭科教育学会誌, 32, 60-66.
- 中尾 達馬・加藤 和生(2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学紀要, 5, 19-27.
- 松岡 治子・和田 佳子・花沢 成一 (2000). 青年期男女における親準備性の性差および母性度・父性度の発達: 親準備性の研究(1) 母性衛生, 41, 492-499.
- 松岡 治子・和田 佳子・花沢 成一 (2000). 青年期男女における親準備性の性差および母性度・父性度に関する要因の検討: 親準備性の研究(2) 母性衛生, 41, 500-505.
- 岡本 祐子・古賀 真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関する要因の分析 広島大学心理学研究, 4, 159-172.
- 斎藤 益子・瀬口 チホ・本松 研一 (1992). 妊婦の母性意識とその形成に影響する因子: 母親・父・幼い子どもとの関わりより 母性衛生, 33, 64-72.
- 佐々木 綾子・小坂井 隆・中井 昭夫・波崎 由美子・松木 健一・定藤 規弘・岡沢 秀彦 (2010). 青年期

男女における親性発達と神経基盤の関係 ベビーサイエンス, 46-65.

備考

本研究は、平成 29 年愛知みずほ大学大学院修士論文『親になるための共感性におよぼす養育環境の影響』で発表した一部に加筆・修正したものである。
なお、本研究に関する特記すべき COI はない。